

第5章 ソーシャル・ネットワークと移行

若者はどのようなソーシャル・ネットワークの網の目の中で移行期を経験するのであるか。それはどのようなプロセスなのか。ひいては、どのような要素が移行期の支援という意味で有効に働くのだろうか。ソーシャル・ネットワーク¹の重要性は、1)それが若者へ様々な具体的また精神的サポートを供給し、2)また若者が種々の判断や決断を行う際の幅広い材料を提供してくれる点にある。どのようなソーシャル・ネットワークが有効な支援となりうるかについては、今回の調査はインタビュー時点で移行期の「困難な」状況にある者を協力者としたため、なにが有効に働いたかという点での分析は不可能であった。インタビュー時点での困難な状況は、「これまでのソーシャル・ネットワークによる支援は十分ではなかった」という理解になるからである。(この点については、「何が移行期における成功-移行の達成」なのかという、幅広い議論が必要となる。) 今回の分析では「このようなものが有効/有意義であった」という結論は引き出せない。が、「何が欠けているのか」「このようなタイプのソーシャル・ネットワークが、必要なのではないか」という指摘のレベルでの分析を試みる。

1. 移行期を中心としてみるソーシャル・ネットワーク

それぞれの若者が、多様なソーシャル・ネットワークの中で学校経験を経て、仕事を中心とする生活への移行を始める。ソーシャル・ネットワークはライフステージの推移により変化していくが、この移行期は、ほとんどの者にとって10年以上をこえる学校を通じたネットワークが影をうすめ、若者の生活する場が大きく変化する時期でもある。若者の移行期を全体的に理解する重要さは近年ますます強調されてきており、そのためには、若者を中心に、前章に含まれていた学校、職場、家庭も含め、さらに交友関係、地域でのつながりを含めた全体的なソーシャル・ネットワークを、インタビューのデータからマッピングすることが必要とされた。そしてそれにより、いくつかのパターンが浮かび上がってきた。この項では、移行期のソーシャル・ネットワークはどのように変化していき、若者はそれをどのように経験するのかについて考察し、いくつかのパターンを描き出すことを目的とする。また、はじめの2項では若者のライフステージの変化に伴うソーシャル・ネットワークの変化を浮かび上がらせるため、これまでの章とは異なり、幾人かの若者のライフコースの一部を概観する。

¹ 「ソーシャル・ネットワーク」は様々なニュアンスで用いられることばであるが、ここではネットワーキングする(動詞としての network)という能動的なものでなく、「お互いに関連しあいながらひとつのシステムとして働く、数多くの人々や機関(の存在)」という意味にもっとも近い。この章で用いる「若者のソーシャル・ネットワーク」は、多くの人々が関連しあいながら網目状に存在する、若者の日々の生活の場/生活世界」というふうに意味付ける。

1.1 縮小していくネットワーク

就職したての頃は（学校時代の友だちとつきあっていた）。だんだん過ぎていくうちに専門学校時代の友だちは専門学校時代の友だちと遊ぶようになるんですね。そいでもう遊んではいないですね。

〈43cm・19歳・高卒・男性〉

明らかに注目を必要とするものとしてまず初めにあげなければならないのは、学校の在学時代に存在した様々なネットワークやそれを築く「可能性」が、卒業後または中退後顕著に減少するという点である。学校を通じての同学年または学年をまたいだ友人関係はもとより、重要な関係になりうるそこでの年長者（教師・関係者）とのつながり、学校がもたらすソーシャル・ネットワークの拡張の可能性（クラブ活動、イベント他）など、何かの機関に属することによるソーシャル・ネットワークの「躍動化」面での恩恵は、多くの若者に存在した。が、いったんそこを離れ、次の機関（職場も含む）への所属が途切れた場合、それまで表面化／問題化していなかった「躍動化」は大きな課題となってくる。縮小していくソーシャル・ネットワークの問題は、個人の社会的発達の機会を減少させ、自信を失わせたり現在の状況へのやる気を減退させ、不活性化へと結びつくようにみられる。

冒頭のように語ったこの東北地方の19歳の男性（表5-1）は、小中学校は野球部で活発に活動し、上のレベルの高校を薦められたが家から近い公立校に進学、資格がとれるかと考えビジネス科を選ぶ。アルバイトをしながら高校生活を過ごし、就職について考える時期を迎える。コンピュータ関係の仕事が希望だったが、専門学校をでなければならぬということであきらめ、夏休みに仕事の内容はこだわらず求人票で週休2日制・保険のあるところを自分で探す。

専門学校いってもやっぱお金かかるじゃないですか。アルバイトとかして、お金だしたりするのもしやだなと。

専門学校いくと、結局は今度は全部自分で仕事探さないといけないんで。2年後に就職難がなくなるというのもないんで。そう考えると専門学校いくんだったら、その会社で2年間がんばって少しでも差がつけられたらいいかなって思ったんだけど。

このような意欲で望んだ仕事は、1ヵ月の助手の経験の後、突然困難さを増してくる。

求人票書いてあるのと、ちょっとは違ってくるとは、思っていましたけど。実際やってみるとすごく違ってたんで、ちょっとどころじゃなかったんで。ある程度覚悟はしてたんですけど。

長時間労働（朝5、6時から夜12時すぎまでなど）で、夜10時11時は普通という毎日が続く。

表 5-1 移行期のライフコース概観 <43cm>
(19歳・高卒・男性)

それぞれの場でのできごと・活動・つながり (概観)

(歳)	学校	仕事	家族	その他 (友人、地域など)
14 15	野球部で活発に活動 先生とはよく話すほう		勉強しろというタイプの親ではなかった 親とはよく話し、進路についても相談する 「自分の主張を第一に考えてくれる」	小・中と野球部楽しかった
16 17 18	公立普通高校ビジネス科入学 成績は「中の中」まじめに登校 ワープロ検定や簿記資格取得 高校時代の夢はなし「ほんとうに平凡に」 楽しく過ごせた「3年間早く過ぎた」	ファミリーレストランでアルバイト(1年) スーパーマーケットでアルバイト(1年) 運送会社の求人を調べる。 夏休みあけ、運送会社を受ける 自動車教習所へ通う(運転が好き) トラックでの運送の仕事に決まる	小遣いはもらわず 親にも相談「自分が頑張れるならやってみなさい」 親は、車を運転する仕事で、一応心配する	友だちのいる職場で、楽しかった 友だちと家でゲームをしたり、街へ行って買い物やぶらついたり 友だちは多い 友だちはだいたい就職
19	学校と行き来はなく、今回のインタビューのことで突然電話をもらった	トラックの運転。1ヵ月助手 10ヵ月後退職。たまに求人表を見に行く ずっとテレビ見て1日終わるくらい	自由にさせてもらったので、親に恩返ししたい 親「そんなにきついんだったら、やめていいよ」 親「早くさがしたほうがいいよ」	職場では、休みがバラバラで同僚と会う時間はなかった 仕事について情報交換する友人はいない

(ずいぶん頑張ってきたけど、一番辛かったというのはどういうことですか?)
やっぱり朝5時とか6時に起きて、夜遅く、また次の日も早く起きてということが続くと、身体がだんだんもたなくなってくるんです。でも「やっぱりみんなやっていることだから」って我慢してたんですけど、やっぱり辛いなって。

職場では周りほとんど年上で、1人いた18歳の社員は入って2~3ヵ月くらいでやめ

てしまう。菓子配送の仕事は、「直接」時間を強制されるような長時間労働というより、これだけの仕事をこなすためにはこれだけの時間が必要という、自ら計画をたて責任をもって終えるような自律的働き方だったことは、記してしておくべきだろう。

店ごとに何時までに来てくれといわれると、こういう周りでやると間に合わないから、やっぱり早く出ないといけないとか。(それは自分で決めるわけ?) はい、だいたいほかの人の意見もやはり聞いて、「早く出たほうがいいんじゃないか」って。ありましたね。

結局、身体がもたなくなり、10ヵ月後に退職する。その会社には過去に同じ高校から5人入社しているが、彼²の入社時には1人しかおらず、退職時にはその1人もすでに辞めてしまっていた。

その後6ヵ月、インタビュー時点では、まだ前職のショックともいえるものが残っているように思われた。

いちおう、やっぱり仕事につかなくちゃとは思ってるんですけど、前回のことがあったんで慎重に選んでいると、したい仕事が見つからないんです。(求人票とか見に行ったりするの?)ほんと、たまーにですね。ハローワークで。もう、すぐコンピュータのとこ行って、ペッペッと10分から20分くらい見たら帰ってくる感じですね。

このような経緯をへて、現在はおもに家で過ごすという状況になっている。

(その間、どんなふうにごろごしているの? やめた当初は疲れちゃってたから寝てばかりかもしれないけど。)ほんとにもうダラダラしてますね。(…)なーんにもしてないですね。テレビ見てゲームしたり本読んだりで終わっちゃいます。

<43cm・19歳・高卒・男性>

厳しい労働経験になった前職をやめたあと、限られた友人との交流のほかは、このようにおもに自宅を中心に1人で過ごすことが多い。

そして、現在の慎重な、消極的とみることもできる気持ちのありようについて、以下のよう

に表現した。
(じゃあ今のところこう何かこういう機会があればやるのになということはない? 例えばただでコンピュータ教えてくれるところがあれば行ってみようかなとか。)ほんとうにきっかけですね、もう。ホントにきっかけが何かあれば多分。自分が何か来て「あ、これだ」と思えばやると思うんですけど、何か来て、なんとも思わなければ、何もしないですね。

以上のように、この男性の学校期からの様子の変化を概観してみると、現在の彼の生活の

² 三人称については、「彼(ら)」「彼女(ら)」、そして「彼ら彼女ら」を意味するものとしての「かれら」を用いる。

様子が、人との関わりの幅広さの面でも、経験の深さという面でも非常に限られたものであることが浮かび上がってくる。志望だったコンピュータ関係の仕事はあきらめたが、進路を決める際には、「(専門学校へ行かなくても) 会社で2年間がんばって少しでも差がつけられたらいいかなって思った」という。このような意欲が、初めての正規雇用の就業体験のあと、低レベルの状態にあるといえよう。縮小感がみられる現在の状況は、さらに縮小していくのか、またはまだある意味で前職からの回復期にあり、時期がくればみずから視野を広げあらたな経験を得るために活発に動き出すのかは、時を待たなければわからない。が、一つ確かなのは、それはほとんど「本人しだい」であるという状況であろう。後者への道筋により近づけるための何らかの働きかけは存在しない。概観をみても明らかのように、学校からの働きかけはなく家族の働きかけは限られ、仕事の世界に関してはハローワークでの限られた求職活動という形しかなく、彼自身が閉ざしている印象もうける。そして友人との交流も限られ、その他のソーシャル・ネットワークからの可能性も、現在のところ閉ざされている。

同じく東北地方に住む、高校卒業後2年目の女性も、アルバイトをしながら求職活動をしているが、ソーシャル・ネットワークの縮小がみられる。友人とのつきあいがほとんどなくなり、一方、新たな経験を広げるような活動はみられない。

(今もつきあっている友だちっています?) いますけど、そんなにもう頻繁に連絡とったりはしないですね。(みんな仕事している?) はい。後はもう大学とかで東京の方に行ってしまったたり、遠くは沖縄に行ってしまったたり。

(おつきあいしている人はどんな人なの?) あんまりないですね。(2時半にバイトが終わったら暇じゃない?) 暇、暇ですねもう。誰か遊び相手探すか、それか、お兄ちゃん結婚して子どもいるんで子どもと一緒に遊んであげたりとか、親戚がそっちの方に遊びにいたりとか。(高校時代の友人で残っている人は何人くらい?) のは、なんたら5~6人ですかね。(その人たちはたまに会うくらい。その人たちと何か一緒にすることもないか?) ないですね。やっぱ時間帯とかも合わないことが多いみたいです。

(電車で1時間くらいの距離の大学に通っている友人との交流について。)

(その友だちとは、会うことというのは、そう、しょっちゅう会うわけでなくて、月に一度くらい?) ないですね。月に一回もないです。(電話とかメールとかも?) ないです。(ふだんこう何か一緒に遊ぶという友だちはいないんだ。) いないですね。

(じゃあ2時に終わってなにしてるの?) もう帰ってきてお風呂入ってご飯食べて、遊んでるっていうか、姪(幼児)と遊んだりとか、テレビ見てたり。

<26cf 20歳 高卒 女性>

卒業後3ヵ月の時点でインタビューを受けた、同じく東北地方に住む19歳の女性は、地域の雇用状況が厳しく「ゆっくり探して」いる間に卒業を迎え、以来求職中である。彼女はまた専門学校に行っている高校時代の友人との交流も多く、「友だち」が今の生活の中心と話す。

(今、自分の生活の中で中心にあることって?) 友だちかな。(「友だちとの付き合い」)

ってというのは、今日は、ハローワーク。友だちといくの?) 1人でいったことない。(1人でははいりづらいかな?) んー、あと、向こうが車もってるから、送ってくれたりするから結果的というか友だちから誘われると、「あー行く」。自分ではふんぎりがつかない。

<24cf・19歳・高卒・女性>

まだ卒業後間もなく、専門学校・求職中両方の友人との交友がその生活の中心だが、上の例にあるように、専門学校の友人がその対象から離れていくことも考えられる。学校、仕事の場でのソーシャル・ネットワークをもたないこの女性のリソースは、求職期間が長引くにしたがいさらに狭まっていくことが予想できる。

また、このようなプロセスは地方だけではなく、都市部の移行期以前からのソーシャル・ネットワークが希薄な若者にもあらわれる。極端な例だが、様々な困難な状況に加え、祖母や母の死を経験した若者は、そのショックもあり外部との交流を断ち、孤独感からエネルギーが枯渇してしまった自らの状況を語った。母親の看病に専念していた時期の後（インタビュー時）：

ほんとは、今すぐ死にたい気分だけどね。ほんとに、「寂しすぎて死ぬ」の意味がわかる。ほんとに寂しいと死にたくなるもの。(…)半年ぐらい、ほんとに人との交信を断ってたから。

<50em・25歳・専門卒・男性>

現在の時点では、このような状況の把握と対応の必要性の認識が十分でなく、若者は個人のリソース（学校時代の友人、家族や親族）で対処していくしかない状況といえよう。リソースのない者は、長期化により孤立に近い状態になりうることもあり、自己不信、あきらめを深め、重要課題である求職活動や自分を高めるための活動が困難になっていくと思われる。学校・これまでの求職支援関連機関の他に、若者がそのソーシャル・ネットワークを維持するのみでなく、新たに豊かにできる場所・機会（活動）が存在することが必要となつてこよう。幅広さ・豊かさを求めるためには、そこは就業中の若者も含めたさまざまな若者が利用する、多様性をもった場であることが望ましいのではないだろうか。また、学校を離れることがそのまま直接活動の停止にむすびつかないような活動が、在学中から必要だと思われる。例えばスポーツや演劇などの活動も、学校・家庭とは別の、第三の場での若者のそのような活動を社会が資金面その他バックアップしていくことは、重要ではないだろうか。その計画実施については、スウェーデンやイギリスの例に見られるように、既存の青少年センターなどの活用に限らず若者自身のニーズを基にし利用したくなるものになるよう、革新的なアイデアも含め、計画段階から若者の参加・関与を前提に進められるべきであろう。これは特に、再活性化が必要とされる地域にとって重要と思われる。地元に残る若者を新たな推進力を地域にもたらす可能性として捉え、そのためにも学校を離れ次の所属をもたない若者が不活発・消極的・現実追従的な存在となり、地域から「誰でもない者 (nobody)」として放置さ

れることのないようにしなければならないだろう。

1.2 閉じたソーシャル・ネットワーク

この縮小していくネットワークのもうひとつのパターンは、学校から離れ縮小していくという点では同様であるが、「閉じた」ネットワークの印象が非常に強いパターンである。上の縮小していくネットワークのケースの場合、地理的距離と地方という要素によりどちらかという「孤立」という印象が感じられるが、この場合、都市部の人口も多く距離的移動も比較的容易な状況の中で「閉じた」という印象が強く感じられる。このような「閉じた」ソーシャル・ネットワークの一例は、学業の面で成功した経験をあまりもたない、都市部の高校中退または高校卒業後に学校を離れ労働市場へと入っていった若者にみられた。また、いくつかまたは多くの短期マニュアル労働やサービス業での仕事を体験している者である。若者は公的職業紹介所や求人誌、友人を通じての求職活動をする一方、主に自らと同じような状況（就業中の者も多いが、長期にわたる、または長期にわたってコミットしているものかどうかは不明である）の友人の輪の中での情報交換とリラックスのための時間を過ごしている。

ここで一例としてあげる、現在 22 歳でピザ配達のアルバイトをしている男性（表 5-2）は、高校幹旋による〇〇料理店の調理師見習いの正規雇用についた。中学 1 年の夏休みに野球部に入ったのがきっかけで、小学校時代、「(いい) 点数をとったら野球の道具を買ってもらえるのでがんばって(いた)」勉強を、全くなくなり遊び回るようになる。中 3 の担任が「すごくいい人」で、何とか高校に入れようとしてくれ、毎日放課後先生に教えてもらい、中 1 のドリルからやり直す。が、かろうじて入った高校での勉強のレベルの低さにがっかりし、「現実逃避」の状態です。高校での就職幹旋では、世間をなめてるから家を出るようと親に言われていたので、「寮付き」という条件を第一に 1 つ目の求人に決め、働きはじめる。

長時間労働の職場（6:30am～10:00pm）であることも理由であったが、自分がほんとうにやりたいことだったのかという考えが昔の友人との再会によって押さえきれなくなり、転勤の話をつきかけに辞めることを決意する

初めての就職で、大事なことも全くちゃんと考えてなくて、その 1 年半ぐらいでやっとなげき出した時に、ちょうどタイミングでそう言われたんで。…考えだしたときに、あっやらんわってすぐわかったんです。…〇〇（他府県）に行けと言われる前に、一回ここ（高校）に呼ばれたんです。ここの 2 年生の子に、就職している人、専門学校の人、フリーターの人というのを何人か呼ばれてしゃべったときに、久しぶりに仲よかった友だちと会って、その子がバイトしながらですけど、ものすごい自分のやりたいことをやっけて、楽しそうにみえて、ああ、いいなと思ってた矢先に〇〇に行けと言われたんで、胸はって「いや」と言いました。

表5-2 移行期のライフコース概観 <41cm>
(22才・高校卒・男性)

それぞれの場でのできごと・活動・つながり (概観)

(歳)	学校 (learning)	仕事	家族など	その他 (友人、地域)
11	成績中の上			野球を始め、頑張る
13 14 15	中1の夏休みから、全く勉強しなくなる 中3の担任に励まされ、勉強をやりなおす		かたい両親(「ぼくだけおかしいと親戚中に言われる」)	中1の夏休みに野球部にはいる。野球部のともだちと遊び回る
16 17 18	高校へ何とか入学 レベルが低く、勉強したという感じではない 「現実逃避の子だった」	回転寿司で1ヵ月バイト(給料未払いと聞き、やめる) スキー用具店でバイト(接客)	親は就職する時は家を出るように言う	高校ではあまり遊び回らず 家で友人とゲームや、街をぶらつく クラスの友人とスノーボードをしに行く
19 20 21 22 23	学校へ一度話をしに行く(就職した者として在校生に) 調理師を辞めた時、一度だけ学校へいく(進路指導の先生はやめていた。職員室でごろごろ)	調理師見習い(学校幹旋、○○料理店) 1年半後、転勤の話をきっかけに退職 3、4ヵ月後、友人の誘いで工事現場のガードマン ガードマンを辞める 倉庫(職安経由。配達、出荷入荷、商品管理) 10ヵ月後退職 以前と同じガードマンの仕事につく ガードマンを辞める 「ごろごろ」生活 求職活動 ピザ配達(6ヵ月) 同時に職安で求職活動	会社の寮で暮らしはじめる 辞める前しばらくは、ほとんど恋人の部屋で住む 退職後親に知れ、実家に連れ戻される	職場の人と仕事のあと夜遊ぶ 学校時代の友人とはほとんど会わず 3〜4ヵ月後友人に電話し、仕事をみつける 20代は友人と2人のみで、あとは「おじいちゃんばかり」 バンドを始める(しばらくして解散)

辞めた直後は、厳しい親もゆっくり過ごせというほど消耗していたようであり。その間、友人との連絡やその他の人との行き来もほとんどなかった。

(料理屋をやめて) 3ヵ月か4ヵ月ごろごろしてました。起きなかったです。トイレと風呂と飯以外。…ゆっくりする時間がなかったんで、(親に) ごろごろしとけて言われたんです。(…) (ほんまにごろごろしてたわけ?) いざ帰ってきたら、地元の友だちの携帯とかもわかんなくなってたんで。

しばらくして友人に連絡を取り、正規雇用退職後、一つめの仕事を得る。

(ほとんど家にいたの?) そうですね、ものすごく太ったんでやばいと思って。何かで友だちの番号を知って、おれ、今、プーやねんって言ったら、なら、おれが行ってるところ来いみたいな、ガードマンですけど、軽トラで〇〇市まで行ってやっとなねん。やるかみたいな感じで、2人で(通勤のために)軽トラ乗ってやってたんです。(…) その子は高卒でたぶんずっとやってたと思うんです。

この工事現場のガードマン派遣会社(個人経営と思われる)の社長が「暴力団」に関係しているようで、恐くてやめたいと思いつけ、仕事探しをしながら数ヵ月働き、職安で正社員の仕事を得て、やめる。が、その仕事(家族経営の〇〇卸売り関係、倉庫での業務)も、取引先が相次いで倒産し会社の将来を非常に不安に感じる中で、遅刻などで叱責されたのを契機にやめ、「もどってこい」と言われていた前のガードマンの仕事にもどる。10ヵ月継続後、一緒に通っていた友人がやめ、通勤手段(車)がなくなったのでやめる(彼は通勤電車の人いきれに弱く、体調が悪くなってしまう)。こうして再び失業状態となる。しばらく「ごろごろとした」あと、ある友人の就職で焦りを感じ就職活動を活発にするようになるが、その内容はこれまでと同様、職安での個人的な探索であった。

そこで友だちが急に就職が決まっちゃったんで、もうびっくりして、ここで僕もちゃんと毎日のように職安行って、ここで決めようと思ったんです。で、挫折ですね。挫折して、ちょっと残ったお金を食いつぶす生活。

(その挫折というのは、ええのがなかったんですね?) はい。もう次はやめることができないので、仕事が厳しいとかじゃなくて、一生できる、まかせていいのかなというところを選びたかったんで、厳しさはある程度やったから経験あるんでそういうのかいところは何か資格がいたり、面接はやってくれない状態で、何個か受けても落ちたりで、2・3ヵ月ちょっとすねてましたね。

そして、再び友人を通じて偶然にアルバイト先を見つける。

お金なくなってどうしようとなった時に、夜中に吉牛食べてたんです。中学校の友だちに会って、「久しぶり、今なにしてるんじゃ」とか言って、「プーやっとなねん」「プー」「何かないねん」、そしたら、その子がピザをやってたんで、「来るか」って言われて、「行きます」。それで今のピザ屋をやっているかたちです。今でもちょこちょこ探してるん

です。

職安に行きながら続ける彼の求職活動は、ガイダンス・相談を伴わない、自身のこれまでの経験と知識をもとにしたもので、彼の話からは前途はふさがっているかのような印象を受ける。希望の職種ははっきりしておらず、この状況の中で前進するためには資格が必要ということを理解しながらも、そのための道筋を描くことはできない。

(ガードマンやめて、何か仕事決めたらうって探した仕事ちゅうのは、職种的にはどんな仕事ですか?) とりあえず将来いけそうなピンきりいきました。職種とか関係無しに、そこそこの給与で…。基本は倉庫系と言うか、土・日休みでというのを探してましたけど、ちょっといけるかな、将来安心だなと思うようなところだったら多少、休みとかお金が少なくてもと思ってたんですけど、そういうのを見て、資格ですね、免許とか。(どんな資格がいいんですか?) フォークリフトを運転できるとか一入って覚えさせてくれたらすぐやれる自信もあるんですけど一書いてたり。あと大卒とか、未経験者オーケーって書いてても、いざ職安に電話してもらったら、今、経験者の面接が何人か予定あるから、やめといた方がいいですよとか言われて。(…) 面接は携帯屋さんとか倉庫と、こういうネジとか工具をつくって売っているようなところも受けた気がします。

このような状態が半年以上続き、インタビュー当時は彼なりにこれまでの経験をふりかえって、今の状況を納得しようとしているかのようにみられた。

(面接を受けたことが) ものすごい遠い過去みたいで、あれなんです。焦らんと、これというのがみつかるまでもうええかと思ったら落ち着きました。焦ったらろくなこと起きんということがわかりました。

この男性の経験は、正規雇用の経験やアルバイトがこれからの仕事に結びつかない、そして新たな仕事を「前進」に結びつけてみつけることができず、当座の仕事を自らのこれまでの同質的なソーシャル・ネットワークの中で見出ししていくことを繰り返すプロセスを表わしている。この間、高校からの初職に関するフォローアップはなく、職安からのガイダンス的なアプローチは存在しない。その状況は、彼自身がどこにそれを求めてよいのか、求めること自体認められているのかとと思っているかのようなのである。まるで、仕事というものは自らの力のみで見つけていくものである—という前提をもっているかのようなのである。そして、それは彼の限られたソーシャル・ネットワークを使ってなされるしかない状況となっている。その求職のプロセスは、学校・仕事関連のつながりをもたず、さらに求職に関しての家族を通じての具体的サポートもないなか、その他つまり彼の交友関係に頼らざるをえない。それは彼と似た状況の友人を意味し、そこからの仕事への道筋は、皆無ではないが非常に限られていると思われる。現在の状況は、停滞感がみられ、これを変化させる何かはみえてこない。

もうひとりの、関西の都市部に住む 19 歳の男性の語ったことばも、この停滞感を現わしているように思われる。定時制高校を卒業し、在校時からの「飲み屋」のバイトと地域の老人ホームでの宿直のバイトをしながら、あまり積極的でない求職活動を続けている。

(やりたい仕事) 見つけれない。(情報源みたいなのはありますか?) 全然ないですね。今は今しか見ていない。(何か新しいので探そうとしているとかいう?) 全然ないですね。(新聞の折り込みで見つけてもなかなか?) はい。

<17cm・19歳・定時制高卒・男性>

同居している父とは不仲ではないが、顔をあわすことが会っても話をするとはなく、父と再婚した義理の母とはまったく話をしない。宿直のバイトも、1人で夜を過ごす仕事である。このような状況の中で、アルバイト先の年輩客が多いパーティタイプの「飲み屋」のカウンター越しの会話を聞くことが、彼にとっての情報源でもあり、その意味で、彼の希薄になっているソーシャル・ネットワークのひとつの大事な部分となっているといえよう。そして彼はその中で、情報を得るだけでなく、(ある程度守られた環境の中で) これまでの経験の中でできなかったコミュニケーション・スキルを育てるという課題をこなしているといえよう。そして、それを自ら認識していることに、個人的な成長も感じられる。

(アルバイトはしてはったんやね。何かよかったということとか、おもしろかったということとか、嫌やったこととか、何かありますか? 自分のためになったとか、お金意外に…) 今行ってる飲み屋さんのバイトやったら話とかもするじゃないですか。世間話とかして勉強になるじゃないですか、いろいろ。(お客さんはけっこう、そんな話をいろいろしてくれるんですね?) はい。人の話はよく聞きやって、マスターにいわれて、聞いていたら、ああ、そうなんだって。会話のキャッチボールを聞いているだけでも勉強になるじゃないですか。話を聞くというのは。(…) あんまり仲良くない人としゃべるのって難しいじゃないですか。話すのって、難しくないですか。それで、そういうので勉強になる。(そういうのは、そんなに得意な方じゃなかったんだ。) 全然。しゃべるのは全然苦手やったので。(それはよかったですね。) はい。

<同上>

ただ、ここから次のステップへと進む道筋が、上記にあるように、彼にとっては「全然」みえていないようであり、また、それをサポートする何かの存在もない。

さらに、関西都市圏に住む19歳の女性(46cf)で、高校卒業後正規社員として美容院で働きながら、美容の職業訓練校に通っていたが、1年後美容院の仕事をやめ、その後訓練校を続けながらアルバイトを始める。この女性の語ることばは、彼女にとって友人を通じて新しいバイトを見つけることが難しくない状況をよく表している。

(今は美容院もやめられて、職業訓練校行って、晩はアルバイト?) はい。
(このアルバイトはどうやって探さはったん?) ○○さん(親しい友人)に聞いたんですよ。「行くねんけど」言われて、ほんなら行こかなーって言って。

(それはどんな仕事してはるん?) 接客。(このバイトはどうですか? やっぱ人間関係とかありますよね。やっぱ。) なんかあんまり馴染めてないから。馴染む気がない、と思いますね。多分。人間その気になれば何でもできると思うから。あんまり、んー、なんか。(ああそれは、第一印象であんまり雰囲気…?) なんか店の感じがあんまり好きじゃない。…なんかいっこいっこが細かすぎて、ちょっと。料理とかその、することすることに何分、って時間が決められてて、(笑) 個人差とかあるからやっぱりそんな

とかがよく分かれへんくて。(それは何店舗もチェーン展開してるようなお店ですか?)
そうですね。(ほんなら、時間守られへんかったら、なんかあるん? 小言うるさいって
いうか。) (笑) あんまり聞いてないんですけど。(しばらくは続ける?) でも、もう新
しいとこ、みつけたんで。宅急便の受付仕事。(で、もうじきにそっちに?) (笑) でも
あんまりやめると、やめ癖がつくからあんまりよくないなって思うんですけど、やっぱ
り中途半端にしたくないし。(これはどうやって探してきはったん?) 友だちに聞いた。
(友だちが働いてるとこっていうんじゃないか?) 短期のバイトなんですよ、それ。だ
から一緒に行かへん? って言われて。夏1ヵ月ぐらい。(あんまりやめるとやめ癖がつ
くっていくのは誰に言われた? お父さんとか、お母さんとか。) いや、なんかそんな気
がするなあって。

この女性は、職業訓練校での生活がこの時点では中心となっているが、将来正規雇用が得
られなかった場合、同様の状況にある友人などを通じてのアルバイトが生活の中心になる可
能性もあろう。そうなった場合、外からの働きかけがない場合は、上述の閉じたサイクルに
なってしまう可能性もあると思われる。

また、その他の例として、カラオケのバイトのきっかけについて、

(先に紹介してくれた友だちはどういうともだちやった?) 幼稚園から高校まで、ずっ
と一緒だった子なんで。(その子もバイトしていた?) ですね。「人数足らんから、誰か
呼んで」っていわれて、僕が行った。

<37cm・19歳・高卒・男性>

このようなプロセスの仕事の変遷と求職の努力は閉じられたサイクルになりがちであり、
このサイクルは、まさに OECD レポート(2000)をはじめとする海外での若者の移行期に関す
る研究が、社会的対処を必要とする問題と指摘した状況である。この男性の例に見られるよ
うに、本人は何とかこの状況を変えたいと考えているが、若者のもっている限られたソーシ
ャル・ネットワークはこれを可能にするものではなく、また、若者の仕事の世界での前進の
道筋が見えるようにするものでもない。一方で、安定した仕事への希望は強い。厳しさは大
丈夫なので、「一生できる、まかせていいのかなというところを選びたい」(41cm、22歳、
高校卒)という求職の方針は、彼が自分はそのような可能性をもった仕事につくために準備
が十分でないことを認識していないことを表していよう。そのための準備(スキルや資格の
取得、第一歩となる職業経験など)という第一段階なくしては、現在それは不可能な場合が
多い。が、そのことに関して建設的なアドバイスを提供し、つぎのステップを共に考える人・
場は、彼の生活の中に存在していないのである。

豊かなソーシャル・ネットワークの必要性

地域の労働市場の状況が、若者が失業と就業を繰り返す状況、または職場でのソーシ
ャル・ネットワークが作られにくい状況を予想させる場合、若者のソーシャル・ネットワー
クは学校から離れると家族と学校時代の友人という範囲に狭まってしまふことを予想するのは、
難しくない。さらに、それさえも薄らいでいく場合、またはもともと大きな存在ではなかつ

た場合、求職中に外に出ていく機会さえも少なくなっていく。これは、都市部でも同様であろう。

やっぱり家にいるとストレスが残念ながら、そういうこともあるので、なんとか外にでようとは思っていますけど。いまの悩みとしまして、やっぱりプライベートでいわゆるそういう人たちがいないということですね。それが今一番の悩みかもしれないですね。(…)ほんとにそれが何とかなれば少しよくなって、ほかのことも円滑にやれると思うんですけど。(この男性は、以前から交友関係が少ない)

<48歳・24歳・大卒・男性>

若年就労支援現場レポート(工藤、2004)は、若者のある程度豊かなソーシャル・ネットワークは、就業継続のために重要な役割を果たすことを報告している。それはまた、前向きな求職活動、失業と就業を繰り返す状況の精神的な支えとなるといえよう。長期化する移行期の若者に、何らかの形でこのニーズが満たされるような支援が必要となる。

同世代を中心とした同質的つながりの存在は、若者に一息つき気分転換する場所と時間を与えているという点で重要である。また、閉じたネットワークの1つめの例にあげた(41歳)男性の場合、困難な労働の状況や先の見通しの見えない中で継続中の初職を辞める大きなきっかけとなったのは、高校時代の友人の「ちがう働き方」に、あるショックのようなものを受けたためであり、それまでの仕事のありようを考えると、一概にマイナスの決断とはいえないと思われる。さらに一番最近の意欲的な求職活動を触発したのも、親しい友人の正規雇用への移行であった。このように、若者に決断のきっかけを与えたり、新たな意欲を与えたりするという意味で、近い存在である同世代の友人の存在は重要である。

一方でここでみられる状況は、このような就業と失業を行ったり来たりしている状態の者にとって、これまでの枠を超えたソーシャル・ネットワークの広がりを得ることが困難であることを示している。また、そのような自らの意思も活性化されていないと思われる。視野の広がり、新たな見方の獲得などによる個人的発達への機会、そしてそれによる職業面での新たな可能性が非常に限られてくるのである。求職活動によって得られた仕事もこれまでのものと大きな違いがなく、長期継続の意欲や見通しが得られにくくだけでなく、職場を通じてのソーシャル・ネットワークの広がりとそれを通じての前進も得られにくい。若者は「これ以上やっても同じ」というようなあきらめとまだあきらめたくないという気持ちの葛藤の中で、「停滞している」という感じもみられる。このような若者も、ソーシャル・ネットワークの躍動化が必要であるが、かれらの「場所と機会」は、上のものとは異なったアプローチが必要であろう。1つには、都市部という特徴もあり、このタイプの若者はある程度の数の若者との交友関係が保たれており、仮に場所と機会が存在したとしても「自分には関係のないもの」として、利用されずに見過ごされる可能性が大きいと思われる。かれらのニーズを重視した「場所と機会」が必要であると共に、提供側のアウトリーチも含めた人と人との活動的な関わりを通してかれらを「場所と機会」にガイドするといった積極的アプローチも必要

となつてこよう。

また、最後になるが重要な点として、就業支援機関のスタッフが、若者のソーシャル・ネットワークの中のひとつの重要な存在になることは、このような状況の若者にとって大きな意味をもってくると思われる。スタッフ側の意識の面でのそのようなアプローチが望まれよう。さらにそのような関係は、若者が仕事についてからも、仕事上の相談ができる存在として継続されるべきであろう。縮小していくネットワークの1人めの例としてみた若者の場合、初職での与えられた環境の中で、どのように働き続けることが「成功」へつながったのか、それへの答えは難しい。運転の仕事での彼のような長時間労働の疲労の蓄積が危険であることは、明らかであろう。この時点で、彼のソーシャル・ネットワークにこのような不安や疑問を理解し、雇用側に対して、彼の継続の努力が可能となるような何らかの対応を打診だけでもできる存在がいたら、退職後の彼のダメージはこれほどでなかったのかもしれない。彼の置かれた状況が困難なのは決してすべて彼の責任でなく、「仕事」の面での改善も必要であるということを確認し何らかの対応を試み、また若者の努力を認識する機会を提供するのは、若者が「次の一歩」をふみ出すために重要なことであろう。

1.3 拡張を求めるソーシャル・ネットワーク

もう一つの非常に異なったパターンとして浮かび上がってきたのは、ここで拡張志向のソーシャル・ネットワークと名づけたものである。すでに述べた縮小していくソーシャル・ネットワークからみると、肯定的な状況にあるといえよう。これは例えば、いく人かの若年者対象就業支援機関の利用者にみられたもので、「もっといろいろな人に会って、様々なことを知って、たくさんのことを学びたい」といったニーズを感じている状況である。小学校を含めたさまざまな、そしてしばしば困難であった学校経験、かれらなりの仕事の経験を経て、長い模索の時期の後自らのこのようなニーズを感じ、そのニーズを満たすために活発に動いている、また動こうとしている。

塾と就業支援機関でのアルバイトをしている24歳の男性は、農業などのさまざまな短期の仕事を経験した後、現在の支援機関でのアルバイトの仕事を続けたいと思っている。直感的な仕事とのめぐりあいをしてきたと感じており、このようなめぐりあいを得られるソーシャル・ネットワークの存在を重要視している。

塾は、行きつけの喫茶店のマスターからやってみないって。そういう人とのつながりって、やっぱり大事にしてるから。

<7cm・24歳・中退後定時制高卒・男性>

現在の相談関連機関の仕事に関連して、

(某テレビ局)で取り上げているのを見まして、テレビを見て直感的に、あっ、〇〇さ

んなら何か話しがあいそうだって、直感的に。実際そうだったんですけど。それで会いに来て。直感的に感じましたね。

(ここで、ちょっと関心の向くままに動いてみたら、それもいいかなと?) いいかなという感じですね。1年ぐらいこういう仕事とか、いろんなところへ行っている人となつながりをもつ中で、また新しいものをみいだせるんじゃないかなと。そうですね。1年ぐらい、もう少しかかるでしょうか。

この仕事はほんとうによやくチャンスがめぐってきたなっていう感じで。とりあえずこの仕事をやって。まあ、自分なりに暇な時とか、何かのシンポジウムとかいろいろなところにいったりして、友だち作って、ネットワークをつくってっていう感じですね。

年上の方とももっとつきあいたいと思います、男女とも。いろいろ学びたいなと思うし。

彼は、ロール・モデルとでもいうべき存在が中学高校の友人のなかに存在し、それをひとつの道しるべにしていると思われる。

自分の道とかを自分の手でつかみたい。僕の友だちと違ってけっこう、まじめな人とか素直な人で、何かに打ち込んでいるとか、目指すものがあるので、そういう人がけっこう多いんで、自分も何かを見つけないと。

塾の仕事を通した経験からこどものことがいやになっており、将来のこどもを含めた家族での生活は想定されていない。そのため、「今はぜんぜん、お金を稼ぎたいとあってあんまり思わなくて、最低限生活できるお金を稼いで」という背景もある。

このような状態は、幅広い経験を提供するという意味で肯定的に捉えられるべきであり、仕事を日常生活の射程にいれながら、積極的に可能性を高めていくプロセスと見ることができよう。

また、首都圏に住む20歳の男性は、3年後のことについて次のように語った。

(3年後どうなっていくのとかありますか?) 自分がどうなんだろう。お金の面でいうと難しいんだけど、もっと成長していたいとか、もっといろんなことにこうなりたい、うまくできるようになりたいとか、例えばコミュニケーションでも、自分の納得する形であるわけじゃない、話し方なり、人との接し方だとか。そういう目標はありますけど。

<5m・20歳・定時制高中退・男性>

この男性は、小学後期から断続的に学校に登校しなくなり高校を中退、音楽学校を経て現在NPO団体の非常勤スタッフと他のいくつかのアルバイトに従事している。これらのアルバイトも自分で様々な団体の活動や集まりに参加し、その中で自ら探し得たものであり、行動的な男性である。今の活動を3年後も続けたいが自立したいという思いも強い。

(例えばこういうふうになりたいという理想の人とかはいる?) そのときそのときですよ。僕の周りですごい人がいるんです、結構。やっぱり、あっ、カッコいいなと思って、同じふうにはできないけど、自分なりの何かというのは伸ばしていけたらいいなと。

(今の活動で食べられるようになったらいいなと一応考えていて、今の仕事をしていく中で、自分には人格面じゃなくて、こういう能力が足りないと思うことってありますか?)
僕、全面的に足りないです。必死で伸ばす一方ではなくて。

(何かの勉強を試みようという?) いろんな勉強を試みたいですね、時間があれば。例えば僕、写真好きで、カメラ、一眼レフ、そういうのの勉強とか、あとホントいろんなことですよね。政治のこととかも勉強してみたいなと思っているし、いろんなことをやりたいなと思うけど、時間がとれないという。(そうだね、これだけやっていたらね。) いろいろやっていたら全部だめになっちゃう。(…)(現在関係している NPO) 関係のを読んで、あと好きな本を読んで終わっちゃう。いろんな勉強はすごくしたい。

<同上>

一方、このようなパターンに入ると思われるが、長期にわたり様々な活動を行き来し続け、次のステップといえるものにたどり着かないケースがあることも、付け加えなければならない。この女性(10df・28歳・大学中退)には、精神的な健康を害しているというハンディキャップが存在するという背景があるが、宗教団体、ボランティア、英語に関係する集まりや平和運動などへの参加など、ソーシャル・ネットワーク拡張志向が、様々なリソースを作り出すプロセスになるというより、彼女にとって消耗的な意味をもっているようなケースとみられる。

ソーシャル・ネットワークを拡張させ、それによりさらに経験を広げ学び続けることで移行期における課題を乗り越え成長していこうというプロセスを、あるていど順調に進ませるために何らかのサポートが必要であるのか、それともここまでたどり着けば各人がそれぞれの形で目的地にたどりつけるのか、今回のデータからはその答えはでてこない。が、それぞれが試行錯誤で進みたどり着ける者はよいが、そうでない場合、また時間がかかり過ぎ失望したり、その過程でのなんらかの障害によってせつかくの積極的活動が挫折したり、またはその「プロセスの中にいる」ことに適応し過ぎ、何かを決断して仕事としてコミットしていくことが先延ばしになりすぎたりといった懸念が、浮かんでくる。これは、高学歴の若者の移行期長期化のパターンとの類似性からであろう。もちろん、すでに述べた上の二つのソーシャル・ネットワークのパターンに比較すると、かれらの活動は多くの可能性をはらんでおり、肯定的に捉えるべきであるのはいうまでもない。しかし、移行の長期化は本人も含め周りの者に様々な有形無形の負担がかかる状況となることが多い。

(今はもう何とか独立しなきゃみたいなの、そういう気持ちはあるんだ?) ええ。(今、積極的に情報収集したりして歩いているんだから。) そうですね。やっぱりちょっと家にいると気まずいんですね。(気まずい?) 今、妹のほうも家にいるし、妹も実は派遣の会社なんかでちょっと仕事を探しているんです。きょうはたまたま家について、どっちもここにくる予定はあったんですけども、やっぱりいびられたりすると家にはいづらいですね。(いびられちゃうの? 妹さんかな。) 妹、けっこう口が…。(きついな。一番きついのは妹? お母さんはそんなにいわないでしょう。) 妹ですかね。今ちょっと妹のほうがいづらいく言う。

<36em・25歳・大卒・男性>

親からのプレッシャーが少ない場合でも、上のように兄弟姉妹からのプレッシャーを受けていた者は、少なくない。このようなプレッシャーが、何か突出して困難なできごとに見舞われた際に、若者がそのショックに耐えられず無謀な決断をしたりするひとつの基調となる可能性があるだろう。（イギリスの場合、その結果は出奔そしてホームレス化の危険となる。）しかるべき時期に拡張したソーシャル・ネットワーク経験で得たプラスをもとに、次のステップ（たとえば、何かにコミットする段階など）に向かつてのステップがなされることも、望まれるのではないだろうか。また、外からの働きかけとしては、たとえば何らかの形で段階をおって責任のある仕事を増やすなどの形で前進させる意識も重要ではないだろうか。ほとんどの者は様々な機会を得て成熟に向かうだろう。が、上記の女性の例に見られるように、明らかに介入が必要なケースもある。

ソーシャル・ネットワークの拡大に焦点を当てている者が、どのようなプロセスを経て、「仕事」の面でどのような結果へとつながっていくのかについては、今回は「まだつながっていない」者のみを対象としたためにそれについての十分なデータは得られていず、この点での分析は不可能である。が、このような支援機関の拡大に伴ってここでみるパターンはより多く表面化してくることも予想され、また「ひきこもり傾向」と呼ばれる経験をもつ若者の多さも、このようなケースへの有効な支援の重要性を示している。このような若者が、第一になによりもソーシャル・ネットワーク拡大を求めているという状況の中で、それはどのように有意義な結果へと結びついていくのか、そのプロセスはどのようなものか。結びつかないとしたら、どうしたらこのような状況がプラスになるように支援できるのか、かれらの成功を確かなものにするために提供可能な支援があるのか。これらの疑問に答えるためには、このようなソーシャル・ネットワーク拡大のニーズを強くもち活動している若者のフォローアップが重要になってくるだろう。これらを少しでも把握し知識として提供していくことは、若者へ移行期における発達・前進のひとつの具体的なルートを示すことができるだけでなく、同様の問題をもつ移行期を控えたより若い世代とその親、長期にわたって成人した若者を支えている親にとっても、重要な情報となると思われる。

2. 「もう一つの選択」のためのソーシャル・ネットワークの必要性

若者は自分の将来について、また現在の生活に関してさまざまな物事を考え、選択や判断を下していく。そのプロセスを理解するというのが、今回の調査の一つの目的であった。移行期に関して非常に重要な影響を与える学校・学習からの離脱の際、その判断の拠り所（準拠枠）の大きなひとつとなるのは、「友人」と思われる。「そういう人をたくさん知っている」ということからくる安心感のようなものが、若者にゴーサインを出すことが多いのではないだろうか。このことを強く知らされたきっかけは、10代で未婚のまま出産を控えている女性のことばであった（ID番号は伏せる）。生まれてくるこどもの父親とは結婚・同居の予定はなく、継続していたアルバイトも家人の世話などでやめ、主に自宅で過ごしている。子ども

を産むことについての不安にどのように対応しているかを知ろうとした質問に対して、「不安はべつにない」と答えた。その理由を尋ねる質問には、そのような友だちをたくさん知っているから、そういう状況でちゃんと頑張ってる友だちがけっこういるから、と説明する。もちろんそれだけがすべてではないであろう。が、同様のことをやってきた（やっている）友だちがいる、だから自分も大丈夫だという根拠からくる安心感は、決して小さくないように思われた。それをすることによるプラスやマイナスについては分からないが、とりあえず、みんなやってるから大丈夫、やってみたい。これと同様の説明が、もう一人の女性からもなされた。

16（歳）の時かな。友だちの紹介でつきあった子がおって、ほんでそのつきあった子のこどもをお腹にはらんでしまって、まあ産む前に別れたんやけど。んで産んだと。17の5月くらいかなあ。だから子どもも別になんていうんかなあ、ノリで産んだみたいない感じがあって。まわりの子らが産んでるから産みたいみたいないノリがあって。実際産んでみたら、なんで産んだんやろとか。こいつがおるから遊びにいかれへんとかになって。そんなんあって家出とか。ま、3時間に1回とか泣くやんか、子どもって。

<4bf・20歳・高校中退・女性>

この「周りが皆やってるから大丈夫」という安心感は、学校や学習を通して前進していくというコースから早い時期に離れていった若者が、その時期を振り返って語ったことばにも、みてとることができる。

中学校、行ってなかったんですよ、あんまり学校、全然。(…) (友だちはたくさん。小学校の頃は?) そうですね。そのころも多かったんですけど。(小学校からずっと?) はい。そっからずっと上がって行って。そやから学校行かんと、みんなで遊んでた。(高校に入った時、何が一番「おもしろいな」と感じた?) 友だちと遊ぶということですね。(中学の時は?) 学校いかんと遊んでただけなんですけど。(…) 中学の3年生の時の担任の先生にはよくしてもらったんで、それで学校いくようになったんで。

<37cm・19歳・高卒・男性>

(野球部に入って勉強するのがいやになったというのは何で?) そういうふうな子と友だちになると、勉強せんでええかなと思っちゃったり。小学校と中1の最初は勉強もそこそこできる子だったんです。野球にのめりこんでいくと、いろんな悪い子と遊ぶのが楽しくなってきた、流されていった感じです。中1の夏休みから全く、ほんとうに全くといっていいほど勉強はやってないです。テストの前日に友だちに教えてもらう。それで10何点。

<41cm・22歳・高卒・男性>

(41cm)の男性は、中学1年の夏休みにバレー部から「すごい悪い子ばかりやった」野球部に移り、小学校時代がんばっていた勉強を全くしなくなり遊び回るようになった。自身がふりかえり、「流されていった」と表現するその理由からは、多くの友人と行動を共にし、その中での自らの行動に対する安心感が、それに対する疑問をある程度封じ込めていたような様子がうけとれる。

また、看護師になりたいという希望を早くからもっていた以下の女性（22cf、19歳、高卒）も「流される」というように表現したが、彼女の状況は「流される」ことを「選んだ」ようすがよりみてとれる。さらに、実際に学業・学校から離れる前の「引力／重力」にも似た存在について語られた。これに対抗するものとして、母親の厳しい態度があったが、あるきっかけで彼女は「流される」ことを選ぶ。

中3になって成績がめちゃくちゃいきなり落ちて、ほんでこんな成績やったら行くところ自体がまずいよって。「でも、あんたの夢は看護婦さんでしょ」「そうや。」もう一回ちゃんとやる気があるんだったら…あきらめんとやりなさいって、先生に言ってもらって。（中2年まではそこそこの成績やったのにと、そこそこて？）真ん中ちよっと上ぐらい。（それが何で3年になったら急に？）友だちが悪かったんやな(笑)。自分が流されやすかったんすね。（友だちていうのは？）最初は小学校の友だちとずっと遊んでたんですけど、違う小学校からもいっぱい集まるじゃないですか。で、クラスかえとかなくて、こうちょっと悪い子と仲良くなって。上の子とかともいろいろつながりができてきて。

（中3一学期終わりの進路に関する親・教師・本人の面談に関して）
（でも看護婦になりたいというのは、もう、その時はとんでいた？）残ってはいて…。行きたいというのも自分では言いたかったんですけど…。もういかないからいいんですよ、もうこの子こんなやし、みたいな感じで、親もあきらめモードがだいぶ入ってたんですよ。（もう7月ぐらいで。ほなよっぽど急激な変化やったんすね？）かなり急激で…。

（でもお母さん、びっくりしやあったんちゃいますの。それまで塾行って…。中学2年生まで塾とかざーっとやってて、〇〇さん個人としては、…ある意味でなんか糸がぷつんと切れたみたいな感じやったんすか？）もともとその人ら（注）とも付き合いはあったんですけど、一線自分の中でおいていた部分があったんです。急に付き合いだしたんじゃないかって、こうずっとあって…。

（注：同じ中学からの5人ぐらいと年上のすでに中学を卒業して高校へ行っていない者、10人ぐらいのグループ）

（知ってたんはもう中学1年とかから…？）うん、ずっと知ってて、その周りの友だちはみんなずるずるとそっちへもっていかれててんけど、なんかお母さんに怒られるっていうのが常にあって…。髪の毛染めたい、でもお母さんに怒られる、ピアスの穴あけたい、でもお母さんに怒られる…。お母さんがすごい恐かったんですよ、私。（…）（それがほな切れてしもたわけですか？）急にぷつっていったんです。なんか、もう…。つきあった子がきっかけでそうなったと思うんですよ。男の子。

高校に入ってから、「晩、別にバイトしてたぐらいで、遊びに行くことはなかった」が、2年生からさぼりがちになる。そこでもまた語られた理由は、皆がしていたというものである。

2年が一番さぼりがちやったんかな、学校。その別に何かあったというんじゃないで…。学校の友だちと一緒に、あの、朝、朝遅刻せえへん時間帯やのに、一緒にマクド行こうや、ていうてマクドいったりとか。（…）カラオケいったりとかして、あ、こんな時間や、休もか今日、みたいな…。そんなんがいっぱいありました。（それはまたそんな友だちがおったわけ？）おった…。ただ単に皆そんなんして。してましたね。

<22cf・19歳・高卒・女性>

このような時点で、個人のソーシャル・ネットワークの中のある一部分の重要性が大きく突出した形になりそれが多くの説明にみられる「皆がしていた」につながるのだろう。そして、親や学校など他の部分が影響を与えることが非常に困難になるようである。この時期が若者の早期の経験の「一時期」であるケースが少なくないにも関わらず、後の若者の軌道に与えるその影響は深刻であり、移行期へのダイレクトな影響は明白である。(41cm)の男性の場合、この中学時代の学習／学校からの離脱は、彼なりにおとなしくすごした高校時代をもってしても取り戻せない結果を残したと思われる。何とか高校に行かせようという中学3年時の担任の助けを得て、毎日放課後残って中1からのドリルをこなし、かろうじて高校に合格する。が、入った高校での勉強のレベルの低さから意欲をなくし、学業面そして将来を考えると意味では漫然とした高校生活を送り、全体の生活態度も極端ではないが、前向きなものではない。この男性が大きく学校・学業から離れていったのは、主に中1の夏から中2の終わりまでだったが、この時期がもたらした影響は本人の想像以上に大きかったと思われる。(22cf)の女性を見ると、離脱へ流そうとする引力に対して踏みこたえている時期は、きっと本人の中にいろいろな考えがよぎったと思われる。その中で、「みなしている」、だから安心という「安心感」に基づく選択が、実際には移行期でのありようからみると非常に「危険」な選択であった。

このような若者にセカンド・チャンスを準備することももちろん重要である。今回の調査ではそのようなパターンのデータは含まれていなかったが、実際に自らの力や周りの援助を得て、様々な形で順調な移行期を経ている若者も存在するであろう。が、移行期支援という観点、そしてソーシャル・ネットワークという視点からは、このような選択を考える時の若者が、離脱ではないもう一つの選択をできる基盤となるソーシャル・ネットワークをもつことを支援することが必要ではないか。このような選択に向かう際、かれらの判断が準拠する枠が非常に限られ狭くなり、その中で安心感を得て離脱を選ぶプロセスに、何らかの形で影響を与え、それではないもう一つの選択ができるような準拠枠を若者が作り出しておくことが必要と思われる。離脱の選択には複数の要素が関係しあっており、その主要因の指摘は難しいことが多い。社会構造的、個人の状況的要素があり、すでに学校を中心として多くの取り組みがなされていよう。移行期の面からも、この問題に対する取り組みの重要性を強調したい。

また、この重要な岐路でこのような影響を与えられるのは、若者のソーシャル・ネットワークの中でかれら自身が重要と認識する存在であり、教条的メッセージやそれを提供する存在ではないだろうと思われる。限られたデータであり、また離脱の危険が大きい時期より後の時期（インタビュー時）にあたるが、若者が生き方のモデルについて語ったことばのほとんどは、それは、遠い憧れの存在でなく、若者が実際にかかわりをもったことのある存在であることが多いことを示している。

(こういう人いいとか、こういう人になってみたいとかいう人いる？ こういう人に憧れるとか。) 友だちが海外にいったるんですよ。英語の勉強。今はアイルランドに1ヵ月くらいいて、ノルウェーに行っていてそれで学校に入る。(どこがかっこいい?) 行動力っていうか。全部自分でお金ためて行って。アルバイトしてずっとお金ためてみたい。すごいな。学費もだし。考えることも人と違う、個性的っていうか。そういうのがいいなって。

<24cf・19歳・高卒・女性>

(今、自分で、ああいう生き方がいいなと思うとか、ほかにも何人かそういう自分にとって影響力があるというか、こういう生き方がいいなという人がいますか?) まず父親ですね。なれないかもしれないけど、ああいういわゆる中小企業のサラリーマンとして、リストラにあいながらも、ずっとやっぱり。かっこいいなと思いますね。

<7cm・24歳・中退後定時制高卒・男性>

それがどのような存在かは、個人によってまたその時期によって異なると思われる。より若い時期では、憧れの対象、親しく近い存在、尊敬の対象など、さまざまな関係が考えられる。今回のデータは、重要な岐路で影響を与えられなかったというケースが主であったため、この点についての分析はできない。どのようなソーシャル・ネットワークの中の存在が、この将来の移行期に大きな影響をもたらす選択をする際、有意義な形で存在し働くことができるのか—この点についてのさらなる追求には、今回とは異なったグループの協力者が必要となるだろう。

ただ一点、今回のデータがはっきりと示しているのは、離脱する時期が中学期にすでに多く、これはこの「もう一つの選択のためのソーシャル・ネットワークづくり」が小学校期になされる必要を示している。離脱の選択をこども・若者が「意識する」時に、もう一つの視点や考えかたを提供する準拠枠をもち、将来に大きな困難をもたらす選択でないもう一つの選択をできるようなソーシャル・ネットワーク作りが必要であろう。これは特に地域的に、または個別の事情で離脱の危険が大きいこどもにとっては、小学校期の特別なニーズとして認識されるべきであろう。

3. 実際のサポートを提供する地域のソーシャル・ネットワーク

関西のある地域では、地域の公共機関での仕事が求職中の若者に提供されることがなされている。それは1年を期限とした短期契約であるが、若者がその期間、ある意味で「守られ」「成長するための」時間・場所・心理的スペースを提供する役割を果たしているように思われる。

この女性は高校卒業後、学校側の学生の生活態度に対する方針とのぶつかり合いで看護学校を辞め、地域の公共機関での〇〇会(学童保育)での、1年契約のアルバイトの仕事を得た。

そうですね。春休みとかになると、いろいろあるんですよ。キャンプとか、子どもたちと交流みたいな。そういうのもあるし、だから夏休みとかやったらもう丸1日ずっとで

ないとダメなんです。そんなんでも苦にならなかったですね、おもしろかったから。職場もいい人ばかりやったし、行くのが楽しかったから。

<12df・20歳・高卒・女性>

彼女はもう一度看護学校の試験を受けることにし、このようにアルバイトをしながら（当時はビアホールでもバイトを続けていた時期がある）受験のための勉強を続けた。そして、職場でのそれに対する支援は、彼女にとって大きな力となったようである。

このアルバイトしてなかったら、何しとったやろな。多分、ぼーっと過ごしてるだけで、お母さんに「何か決めや」とか言われてるだけで終わってたかもしれん。だから、あんねんけどそれに向かおうっていう気には、…。向かっていけへんかったと思う。こんなとかいいねんけどなあって思うだけで終わってたかもしれん。

みんな（職場の人たち）、私のことだけじゃないけど、いろいろ言うてくれるんですよ。「こんなところもあるで」とか、看護の学校とかでも「ここ、どう？」とか。いっぱいアドバイスとかくれたりするし。

<同上>

この公共機関での仕事は、前任で働いていた人が彼女の高校の同期で、その前任者が職員に彼女のことを紹介し、家に直接電話がかかってきたという経緯で始めたアルバイトであった。これは、地域のそのような制度と偶然も大きい彼女のソーシャル・ネットワークがもたらした仕事であり、それは同時に彼女にとって、もう一度自分を立て直し再度挑戦するエネルギーとそのための支援を提供する新たなソーシャル・ネットワーク（職場のスタッフ）の獲得を同時にもたらしたといえよう。

このような機会も、状況によっては十分その機能を果たせない場合もある。同様の仕事を得たこの男性は、父親の関係で本人もその存在が知られていることがきっかけで、声をかけられた。だが、その機会を生かせるための基盤をもっていなかったように思われる。

17か18の時、〇〇会の（バイトを）。（これは誰の紹介で？）これは地域の知っているおじさんというのか。1年間。（ここはしっくりきたんですか？）その当時の年齢の時はしっくりはきてたんですけど、起きれないという最大のミスがあって、あんまり行けてなかったですね。（何時からの仕事？）朝9時から5時ぐらいですね。（けっこう早いなだね。じゃ、これも続けようと思ったら続けられた？）そうですね、でも、それも多分1年か2年の契約やったと思うんで。（じゃ、続けられたけどやめたのか、「もうやめて」と言われたのかといたら？）「やめて」という感じですね。（それは勤務状態が悪かったから？）そうですね、あまりにも。

<1am・24歳・中卒・男性>

また、この男性は、仕事は異なるが再び公共機関の仕事を得る。

今は一応アルバイトという形で1年間の契約で。（この4月からですか？）去年の4月からもう1年とちょっとたっていますけど、また新しい仕事を探さないといけないという状況に。

(今までやってきた、この1年間の仕事について聞かせてください。どんなお仕事なんですか?) モップかけて、モップかけて、モップかけるみたいなことですね(笑)。言うたら体育館の窓ふきとか、中の清掃ですね。

彼の二度めの公共機関の仕事のきっかけについては：

(ここはだれか紹介があったんですか?) ここはまたの〇〇会のバイトの時みたいに、同じ人が「やらへんか」みたいな、〇〇さんという人に声をかけていただいて。(音楽の専門学校に行っている時に専門学校を出たらどうしようかなとかいうことは考えてなかったですか?) どうしようかなとは考えましたが、見えないんですよ。どうしようかなってずっと。(その時に考えたのは?) その時にぱっといつもくるものですから。こんなせえへんか、こんなせえへんかと。とりあえずどうしようかな、ああ、行きますみたいな。(仕事のお誘いというのは結構あるのかな?) 結構ありますね。言うてくれる人が結構いてまして。(それはどんな人? 親戚。) 親戚じゃないです。地域のおっちゃん、おばちゃんとかが「今、どないしているの」と言うので、「いや、こないこないで、歌、頑張ってます」と言うので、「仕事はどないしてんの。いっぺん今度こんなやってみたらどうや」と言うので、そこから話が。

(例えば〇〇の掃除の仕事とか、そういうことだけじゃなく、いろいろな町工場とかそういう仕事の話も入ってくるのかな?) 入ってこないですね。外は。外はあんまり入ってこないですけど。(こういう公的な機関の仕事?) はい、多分その間、やりもって違う、外へ出ていく仕事をみつけやというふうにも多分言うてくれていると思うんですけど。

(それは地域の人が特に〇〇さんのことを気にかけてということなの? それともここにいる若い人たちには。) そうですね。若い子らに目を向けてくれているという大人の上の人らと思います。

彼のこの二つの経験は、このような地域のサポートを有効に生かすためには、ある程度の当人の基盤が必要であるということ、また、仕事の内容によってはこのような機会の重要な一面である「人」との関わりが十分でなく、若者を「支援する」という意味では十分な結果を伴うことができない可能性を示している。

もう1人、同じく公共機関での仕事を得た女性(4bf、20歳、高校中退)の例は、将来の方向性には具体的に結びつかなかったが、その仕事の中での個人の成長の可能性を感じさせた。彼女は、高校1年で中退し、その後アルバイト(スナック、食品加工工場、ペットボトルの検品など)を経験しながら17歳でシングル・マザーになる。現在は本人の祖母に同居でこどもの世話をしてもらっているが、働いている。

(こどもが2歳くらいになって落ち着いた時にこの〇〇会でバイトをしだしたってことですかね?) そうそう、落ち着いた時に、お父さんが〇〇会で仕事せへんかって言ってきて、で、アルバイトじゃなくて一生になるかもしれへんで言うから、ほんじゃ働くわって。(アルバイトですよ?) パート。

彼女の仕事に関する話は、仕事場での「しんどい」経験についてだが、それまでのバイトを語っていた様子とは異なり、その仕事を通じてのある「成長」を感じさせるものだった。

仕事上の子どもたちの安全やそれに対する親からの苦情について、また職場での尊敬の対象であった人に対して、仕事の内容（社会の変化に子どもたちへのアプローチが対応していないのではないかという疑問）に関して尊敬していいのかわからなくなっているという内容である。このようなことを語る時、インタビューの他の部分とはトーンが異なり、他のバイトについての話ではでてこなかった、分析的な説明がなされた。

しかし、彼女はこの職場から、親しいまたはサポートとなる関係を得ることはできないでいるようである。

んで、けっこう男の人が多いから、男の人とは、普通の友だち感覚でしゃべったりっていうのがあんまりなくて。仕事面だけで。(仕事でのつきあいとどまる?) そう。仕事意外のことはあんまり話さないみたいな。けっこう役所の人やから、仲良くなったなって思ったらもう異動するから。まあうちらはずーとなんやけど。周りがかわっていくから。また一から仲良くなってっていうのはしんどいなあ。

だが、以下の彼女のことばは、この仕事を経験し、限界は感じながらも以前よりは将来について前向きに向き合おうとしている様子を感じさせる。

(1年ちょっとやってみてもうすっかり慣れて?) うん。けっこう慣れてる。(どうですか? このまま続けて。) いけそう。(じゃあ特に、何か問題が発生せんかぎりやってみようかなって?) そうそう。だから、うわべだけでやめたいって思ったことはあったけど本心ではないかなあ。まだ、プータローの子もまだ友だちのなかにはおるんやし。で、好き勝手遊んでる子もおるから、そーゆー生活に戻りたいなって思う時がある。(でも本心ではまあそーゆーのもまあいいけど...?) そうそう。やっぱりやめたらこの先。何したらええやろかとか。子どももおるし。(じゃあわりと今の仕事は自分に合ってる?) 合ってるのかなあ。(最初はお父さんの紹介で一生の仕事になるかもしれんでってことでしたけど、パートから正職にかわるってことはないんですか?) ない。(なんか試験受けて、そういう?) その前に、高校卒業していないし、資格とか多分とられへんと思うけど。

以上の例は、短期でもこのような就業の機会を、それをいかせる状況にある者にとっては、大きな転機となりうることを示していよう。一方、生活面での体制作りなどの基盤が整っていないなど、それを活かさない状況の者にとっては、この機会を有効に活かすためのもう一つのアクティブなサポートが必要となろう。(1 am) の男性は、幼少時に両親が離別、主に祖母に育てられるが、その祖母が 10 歳の時に他界し、その後小学校を休むようになる。そのころのことについて：

(お父さん、お母さんからの期待というのは何かありました?) そのころの、うーん、おやじも多分忙しかったんやろうし、僕、おばあちゃん子なんですよ。(…) おやじも忙しい仕事なんで、おばあちゃんといろいろコミュニケーションというか、とってて、それまでは内弁慶やったんですよ。おばあちゃんが 4 年生の時に亡くなったんですよ。そこから多分やる気がなくなったんでしょうね、学校へ行く気もなくなったというか。

インタビューの端々から状況をみていくと、祖母が死亡したのち新しい家族との関係は確立されず、新たな家族が増え、家での生活が彼にとって非常に困難であった様子がかかわれる。そして、そのまま中学でも学業から離れたまま、地域の友人とのさまざまな遊びを中心に過ごし、中卒で働き始める。このような男性が17・18歳の時点で地域での若者支援を目的とした就労の機会を得た時、その機会を意味のあるものとするためには、若者を長い間知っている地域ならではの若者のライフヒストリーを理解したサポートが、鍵となってくるのではないだろうか。サポートにも限界があり、すべてのニーズを満たすことはもちろん不可能である。が、このような貴重な機会を少しでも活かせるような方法を考えていくことは、大きな意味をもっていると思われる。

4. まとめ

移行期および若者を全体的に理解するために、かれらのソーシャル・ネットワークとその変化の理解は重要である。インタビューの限られた時間の中で、そのすべてを語ってもらうのは不可能であるが、限られたデータの中でマッピングを試み、その中でいくつかのパターンとそれに伴う問題が浮かび上がってきた

移行期のソーシャル・ネットワークのパターンとしてまず浮かび上がってきたのは、学校を離れた後の若者のソーシャル・ネットワークの縮小である。地方に在住する若者の場合、卒業後次の新たなソーシャル・ネットワークを提供する所属をもたないこと、そしてそれに加え求職活動が順調に前進しないことにより、若者が徐々に孤立していくような状況がみられた。それは、直接・間接的に若者の活力を低減させ、幅広い人との関わりや多様な経験を提供し個人の発達をもたらす機会をせばめ、重要課題である求職活動に前向きに取り組む意欲を弱めていく。このような若者が、新たな活力を得、長期に及ぶかもしれない移行期に前向きに取り組んでいくためには、若者がそのソーシャル・ネットワークを維持するのみでなく、新たに豊かにできる場所・機会（活動）が存在することが必要となってくる。

また、同様の縮小化は都市部でも起こるが、この場合地理的な距離の近さと交通の便利さなどにより、友人との交流は前者より活発である。が、仕事の提供や情報交換も含めたこのような交流は、短期就業中の同じような状況の友人が多く、そのネットワークは閉じている印象が強い。次のステップを求めながらも、その手がかりはかれらのソーシャル・ネットワークの中から得られず、短期就業を繰り返すパターンが多い。このような孤立を感じない閉じたソーシャル・ネットワークをもつ若者に関しては、新たなネットワークを得られる場の必要性のみでなく、そこへ積極的に結びつけるためのアウトリーチ的方策が必要であろう。さらに、就業支援機関のスタッフが、若者のソーシャル・ネットワークの中のひとつの重要な存在になることは非常に大きな意味をもつと思われる。スタッフの意識面でのそのようなアプローチが望まれよう。

またこれらと対照的に、ソーシャル・ネットワークの拡張を活発に求め、そこから前進し

ていこうとする若者が存在する。過去の学校や職場での困難な経験を経て、かれらなりにその経験を消化し、状況を打開するために積極的に活動している。が、一方このような活動が、仕事の面でも個人の発達の間でもプラスに結びつかないのではないかとされる者もいる。このようなソーシャル・ネットワークの拡張を通じて前進していこうとしている若者の成功を確かなものにするための何らかの支援が必要なかどうか、そうであるとしたらどのような支援があるのか、フォローアップによる継続した調査が必要であると思われる。

判断や状況の理解の準拠枠を提供するものとしてのソーシャル・ネットワークという点で浮かび上がってきたのは、さかのぼって学校／学習から離脱していく時期の若者の状況である。その時点で、離脱を促す力をもつソーシャル・ネットワークの存在が大きくなり、「みんなしている」からという「安心感」が、移行期の視点から見ると非常に「危険」な選択を若者に選ばせている。このような若者がもう一つの選択をできる準拠枠を提供するソーシャル・ネットワークづくりが、離脱の危険が多い時期（中学校期）の前に必要である。地域的、また個人的状況が将来の離脱の危険が大きいことを示している場合、これは小学校期の特別なニーズとして取り組まれることが望まれる。

最後に、公的機関での有期雇用を若者の地域のソーシャル・ネットワークを通じて提供する制度は、若者にとってある意味で「守られた」環境で自らのこれからの仕事について考える時間と場を提供している。ある者はつまずきから自らを立ち直らせ、仕事の面で新しい目標をはっきりさせそれに向かって努力する機会を得たり、またある者は目標が見えないながらも、自分の状況を立ち止まって考え、落ち着いた仕事の環境からの個人的成長を得ているようすがうかがえる。一方、このような貴重な機会も、若者の側の基盤（たとえば生活リズムの自律など）がなかったり、若者の成長を促す大きな要素である、そこでの「人」との交流の少ない仕事であったりする場合、若者がこの機会を生かせる可能性が少なくなる。このような場合には、就業機会の提供に加え、この機会を活かすためにもう一歩若者を支援しガイドするというアプローチが必要と思われる。

引用文献

OECD (2000) *From Initial Education to Working Life: Making transitions work*, Paris: OECD.

工藤 啓 (2004) 『若年就労支援現場レポート No.2 (unpublished report)』 東京: NPO 育て上げネット.